

佛敎研究

第八卷 第一號

五濁と法滅の思想に就て

赤 沼 智 善

一

我々人間の生活は、常により新たにしてより高い、文化への進展としてののみ、意味のあるものであるが、我々は又、この進展の道中、折々、たゞずんでは過去の回顧に耽るものである。回顧の世界に於ける過去は、回顧といふ幕をかけ、詠歎といふ霞を流して、遠くかすかに輝やき、美しく見ゆるものであるから、いかなる人も、如何なる民族も、このありし世の思ひ出に耽らぬものはないのである。然し乍ら回顧は畢竟回顧に過ぎない。回顧が進展の歩みを停めてはならない。回顧が進展を阻めば、それは過去の人となり、過去の民族となつて仕舞ふ。回顧の中に溢るゝ力が、進展の足取りをしつかり踏ましめる時に、その人若しくは民族は永遠に生きるものとなるのである。

支那民族は三皇五帝の古の夢を持つてゐる。さうしてこの夢の中に顯はれて居る所の黄金時代が嘗て實現したことがあるといふ強い理想の目標となつて、支那民族の現實の歩みを確實ならしめて來たのである。

今我が佛教に於て、例へば親鸞聖人が、釋迦如來かくれまして、二千餘年になりたまう、正像の二時はおほりにき、如來の遺弟悲泣せよと悲しみ給うたことは、又過去への回顧に依る現實の悲痛を示してゐるものであるが、佛教徒は一群として、かう云ふ過去への回顧を持ち乍ら、又現實の世下り人拙なきを悲嘆し乍ら、いかようにして佛教徒としての生々の氣を示したであらうか。悲嘆が徒らな悲嘆であつては、その悲嘆の持主は自滅せねばならぬ。悲嘆をかい抱き乍ら、進展の力を持つもののみが將來を有するのであるから、このことは支那日本の教派史の上に於て、特に注意すべき研究の一題目であらうと思はれる。私は茲にかういふ佛教の過去への回顧が、いかにして生れたか、いかなる形式をとつたか、いかに推移したかを、印度の佛教の歴史の上に於て、見たいと思ふのである。

二

右に云ふが如き佛教の上代を憧憬し、現在の時代を悲觀するような思想の顯はれて居るものは、正像末の三時説と、五濁世界の考と、法滅の思想とであるが、この三説は互に關聯して、一つの考

となつて居るものであり、後世では、この三説は釋尊の豫言であり、その當時から佛教徒の抱いて來たもの、やうに思はれて居るけれども、決してさうではなく、次第に前後して組み立てられ時代に依つて、又は人或は團體に依つて大變相違してゐるものであることは、少しく文献を調べれば容易に知り得られるのである。

一體、正像末の三時にしても、五濁にしても、又法滅にしても、原始經典には全くその影だに見得られないものであつて、若しこれらの考を引き起す源となるものを求めやうとすれば、私は左の二つの系統の語句を指し示すことが出來ると思ふ。それは第一には正法の衰滅不衰滅の五理由に關する語句と、第二には正法の止住年月に關する語句とである。

この中、第一の正法の衰滅不衰滅の五理由に關する語句とは、巴利增一阿含五の部一五四、一五五、一五六に出づる左の文である。

1 比丘等よ、これらの五法は正法の混亂隱沒を招くものである。五法とは何であるか。茲に比丘が、尊敬して法を聞かず、尊敬して法を暗んせず、尊敬して法を受持せず、尊敬して受持したる法の義を研究せず、尊敬して義を知り法を知り、法に従つて行はない。この五法は正法の混亂隱沒を招くのである。

2 比丘等よ、これらの五法は正法の混亂隱沒を招くものである。五法とは何であるか。茲に比丘

が經、偈……乃至方廣の法を暗んじない。又聞けるが如く、暗んせるが如く、法を廣く他に説かない。又聞けるが如く、暗んせるが如く法を廣く他に教へない。又聞けるが如く、暗んせるが如く法を廣く反復しない。又聞けるが如く、暗んせるが如く法を心を以て屢々觀覺せず、意を以て調へない。この五法は正法の隱沒を招くものである。

3、又これらの五法に法の混亂隱沒を招くものである。五法とは何であるか。茲に比丘が誤つて組まれた文句を以て經を間違つて取り、又誤つて組まれた文句を以て義が明かならず。比丘が悪語であり、惡語の理由に依つて、忍なく教を善く取らない。多聞にして阿含に通じた、法の受持者、律の受持者、論母の受持者が尊敬して經を他に説かない。彼等の死後、經は根が切れ、保護を持たない。上座の比丘は贅澤にして遲緩、墮落に先行し、遠離に努力せず、未だ達せざるものを達し、未だ到らざるものを到り、未だ實現せざるものを實現するために勤勉ならず、彼等の後の人々もそれに慣ふ。又僧伽が和合を破り、互に謗り互に非難し、互に争ひ互に離れ去り、信なき者に信を生せしめず、信ある者の一部を信を離れしめる。この五法は正法の混亂隱沒を招くものである。

四分律毘尼增一(列六・八二)には、長老波摩那の間に對して、如來滅後比丘不敬佛法僧及戒定以是因緣正法疾滅而不久住。

と云ひ、更に異比丘の間に答へて、

若比丘在律中出家不至心爲人說法亦不至心聽法憶持、說復堅持不能思惟義趣、彼不知義不能如法修行不能自利亦不利人、佛告比丘有是因緣令法疾滅而不久住。

と云ふは、前巴利文の第一文に相當し、

有五法令正法疾滅、何等五、有比丘不誦受誦喜忘誤文不具足以教余人、既不具其義有闕是爲第一疾滅正法、復次有比丘爲僧中勝人上座若一國所宗而多不持戒但修諸不善法放捨戒行不勤精進未得而得未入而入未證而證、後生年少比丘倣習其行亦多破戒修不善法、放捨戒行亦不勤精進未得而得未入而入未證而證是爲第二疾滅正法、復次有比丘多聞持法持律持摩夷不以所誦教余比丘比丘尼優婆塞優婆私便命終彼既令禮終令法斷滅是爲疾滅正法、復次有比丘難可教授不受善言不能忍辱余善比丘卽捨置是爲第四疾滅正法、復次有比丘喜鬪諍共相罵詈彼此諍言口如刀劍互求長短是爲第五疾滅正法。

と云ふは、前巴利文の第三に相當するものである。十誦律の増一法(張六・二四)には、

一有五法正法滅亡沒何等五、有比丘無欲是名一、鈍根是名二、雖誦義句不能正受亦不能令他解了是名三、不能令受者有恭敬威儀有說法者不能如法敬是名四、鬪諍相言不在阿練若處亦不愛敬阿練若處優婆離是名五法令正法滅亡沒。

② 更有五法正法滅亡沒何等五有比丘不隨法教隨非法教不隨忍法隨不忍法、不敬上座無有威儀、上座不以法教授上座說法時愁惱令後衆生不得修多羅毗尼阿毘曇上座命終已後比丘放逸習非法失諸善法是名五法正法滅亡沒。

と二説を擧げて居るが、前所引の文とは別なものである。以上擧げた正法の衰滅に關する記事の後には必ずその反對の五法があつて、これに依つて正法の不衰滅久住を得ることを示してゐるものである。かくの如く經律共に、正法の衰滅不衰滅に就いて、種々の説を出して居るが、正法の衰滅は要する所、人の問題であつて、法獨り廣まらず、人に依つて弘まるその人が、法を傳うる傳統に忠實ならず、法を了解せず、教團人としての統制に缺くところがあり、相爭ふようになれば、法の衰滅を來すことは當然過ぎることであり、このことを以て弟子達及び將來の佛教徒を誡められたことも見安い道理である。以上所引の經律の文は、説き方が豫言的でなく、又豫言的な内容を持つて居らない所に、眞實さがあると見ねばならぬ。それであるから、正法の衰滅不衰滅に關する文句は、當然のことを當然に曰つた迄のものであるが、これが比丘尼教團の成立といふ特種の事情に依つて、正法の止住年月に關する記事を生み、それとからんで、別種の色彩を帶ぶるに至つたものだと考へられる。例へば婆娑論(收八・二八左)引用の經の

迦葉彼當知如來所覺所說法毗奈耶非地界水界火界風界所能滅沒、然有一類補特伽羅當出於世、

惡欲惡行成就惡法非法說法法說非法非毗奈耶 說毗奈耶於毘奈耶說非毗奈耶、彼能滅我三無數劫所集正法令無有余。

といふが如き、この經典の出據不明であるが、前所引のものから見ると、豫言的な處が大に違つてゐるのである。

三

正法の止住年月に關する記事とは、淨飯大王の崩御後、摩阿波闍波提が、數多の釋迦族の婦人達を連れて、遙々吠舍離迄、世尊を逐ひ、婦人の身にて入團を請ひ、阿難尊者の取做しに依つて、漸やく八敬戒法を尊重嚴守するといふ條件で許された時、

阿難若女人不得於此正法律中、至信捨家無家學道者、正法當住千年、今失五百歲。

と仰せられたことを指すのであるが、この語は中阿含一一六瞿曇彌經に出で、巴利では增一尼柯耶八の部五十一經に相當し、其處では、

阿難よ、若し婦人が如來所説の法と律に、家より出で、家なきに出家せざれば、梵行は永く確立し、正法は千年止住せしなるべきに、阿難よ、婦人が如來所説の法と律に出家せしに依り、梵行は永く續くことなく、正法は五百年止住すべし。

となつてゐる。今これを律典で見ると、小會部比丘尼蘊の記事は全く增一尼柯耶のそれに同じく、

五分律(張二・六四左)は、

若不聽女人出家受具足戒佛之正法住世千歲、今聽出家則減五百年。

と云ひ、四分律(列六・一六左)は、

佛告阿難、若女人不於佛法出家者佛法當得久住五百歲。

となつて居る。摩阿僧祇律(列一〇・一七右)には「如線經中廣說」と經に譲つてゐる。今これらの文を考へて見ると、四分律の文は久住と五百歲との間に「千歲今聽出家則減」といふ意味の文字が誤脱してゐるのではないかと思はれる。大衆部の經典は不幸にして増一阿含の外に残つてゐないから經に經に譲つたその經を見ることが出来ないもので何とも曰はれないが、中阿含一一六經、增一尼柯耶のそれと同じいものでないかと考へられる。さうすると、婦人が出家入團しなければ、正法は千年止住するが、婦人の入團を止むなく許したために五百年縮まつて正法の止住五百年といふのが、上座部有部化地部法藏部等各部派に共通する傳説であつたといふことが出来る。それだけ又信賴し得る傳説たることを自證してゐる譯である。

古代の印度の文化は、これまでの如何なる民族の文化とも同じく、男子が建設した文化であるが故に、又男子中心の文化であり、婦人の地位を高め、婦人を證悟する人としては、男子と對當の位にまで昇らせ給うた釋尊も、その教團の形成に當つては、男子のみを構成分子とせられたのであ

るが、茲に養母及びその他の婦人達の、死を堵しての懇願に、餘義なくその入團を許されたのである。釋尊の心中には斯うして出來上つた男女二つの教團には、性の問題から種々の紛亂を來し、そのために又正法の興廢にも關する事件を引き起しはしまいかと案せられたのであらう。この心配が婦人に八敬法を強いることになり、又千年止住の正法が五百年止住の正法になつたとして、遺弟達を強く誡められたものであらうと察せられる。婦人に對する釋尊の考方を基礎として見ると、中阿含一一六經が最後に婦人の五障を出してゐるのは、後世の附加たることを思はしめる。然し幸なことには、印度の佛教史に於て、尼僧教團のことからして多くの問題を生じたといふことは見られない。これは八敬法の制定及び遵守が効果を見せたものであると思はれるが、その外に又、尼僧教團が後世數多いものでもなかつたといふ理由も附け加へることが出來ると思ふ。カリリダーサのアグニミトラの中に、佛教の尼僧のことが出てゐるから、ずつと後世迄尼僧があつたには相違ないが、到底佛在世當時の様な盛大な教團ではなかつたように思はれる。

この正法五百年說到對しては、**婆娑論**(收八・二九右)は、問若正法住猶滿千年何故世尊作如是説と問うて

1 答此依解脫堅固密意而説、謂若不度女人出家應經千歲解脫堅固而今後五百歲唯有戒聞等持堅固非解脫者皆是度女人出家之過失耳。

② 有余師說此依若不行八尊重法密意而說謂若度女人出家不令行八尊重法則佛正法應滅五百歲住、由佛令彼行八尊重法故正法住世還滿千歲。

と二説を擧げてゐる。善見律毘婆娑(塞八・九六左)も、

何以佛不聽女人出家相敬法故、若度女人出家正法只得五百歲住、由佛制比丘尼八敬、正法還得千年。

と云つてゐる。婆娑論の有余師の説と同じものである。善見律毘婆娑は更に進んで、

法師曰千年已佛法爲都盡也、答曰不都盡於千年中得三達智、復千年中得愛盡羅漢無三達智、復千年中得阿那含、復千年中得斯陀含、復千年中得須陀洹學法、復得五千歲、於五千歲得道後五千年學而不得道、萬歲後經書文字滅盡但現剃頭有袈裟法服而已。

と云ふは婆娑論の第一説と相通ふものである。さうすると、經律の所説では正法五百年説であるが、部派佛教の解釋する所では、八敬法の制令に依つて、正法千年止住となし、猶其の後も得道の人は漸次に少なくなるが、法は依然として繼續するものとなすものである。

それであるから、借りに尼僧教團の成立に依る正法止住年月の記事を訓誡的のものとせず、多少豫言的のものとすると、種々の法住年月説の中、法住千年説が最も古く、且つ根據ある説とせねばならぬ。何故なれば、婦人を入闍させなければ、千年正法の止住を見ると云ふのであるから、さう

云ふ特殊の場合を見ないとすれば、千年止住が當然であるからである。これは法滅の年時に就いて云ふべきことであるが、便宜のために茲で云ふと、雜阿含二十五卷、婆娑論(收八・二九)、阿育王傳(藏一〇・二四)、智度論三四(住二・七九)共に法住千年説であり、又大阿彌陀經(地八・四一)も法住千年説を示してゐる。正像合して千五百年説の摩訶摩耶經、大集經、悲華經、大乘三聚懺悔經等は此の説の後の發展であることは勿論である。大阿彌陀經が大乘經典中最古のもの、一であることは、私の他の論文に就て既に説いた處であるが、この法住千年説を有することもその證據の一であると思ふ。

四

原始經典及び律典の記載を尊重する限り、佛滅四五百年代の教徒には、正法の止住五百年といふ語句は、氣にかゝるものでなければならぬ。茲に於てこの語句に對する種々の解釋を要する譯で、婆娑論に云ふ有余師の説、及び善見毘婆娑の八敬法を制定し嚴守されたから、五百年にして法滅するといふ危険は無くなつたといふ解釋は正當であらねばならぬ。婆娑論の第一説、及び善見毘婆娑の五千年得道の人あり、後の五千年は得道の人なくして形式のみ存するとした説は、過去への回顧に依つて、現在及び未來を見下げ貶しめるといふ感情が強く働いてゐるものである。この感情は佛教徒に取つては、一つには印度傳統の時代觀が影響したであらうし、又一つには部派時代の分裂に

依る對抗や紛擾や、又それから起る教勢の不良等が影をさしたに相違ないと思ふ。この時代の感情を顯はすものとして、婆娑論や殊に善見毘婆娑を引くは妥當でないようであるけれども、これらの典籍はその時代の感情又は教義を忠實に反映してゐるものと見るは、強ち無理でもなからうと思ふのである。

それで、婆娑論及び善見毘婆娑の上に擧げた説は、當時の保守派又は現狀是認派の意見と見ることが出来る。現狀に對して不滿な且つ悲觀的な人達は、この佛滅四五百年代の教狀に對して、正法止住五百年の語が、運命的な強みを以て壓し來るを感ぜざるを得なかつたであらう。今茲では委しく當時の教會史的事情を穿鑿することを差し控へるが、試みに佛藏經(列二・七右)の文字を以て幾分當時の教狀を示すものとすれば、「如來の在世三寶一味、我が滅度後分れて五部と爲り、……當來の世惡魔身を變じて沙門の形となり、僧中に入りて種々に邪説す」と云ふは部派の分裂とその實際を顯はすものであり、「當來の沙門弊惡にして鄙賤、深く慳貪を懷き深く瞋恚を懷き深く不信を懷き、三毒熾盛にして、心行麤獷、制御すべきこと難し」(列二・一八右)とあるは、部派者が對他教對社會からの關係を離れて、部派相互間の爭議に没頭してゐる有様を眺めた感情であらうし、「我が法實に多供養を以ての故に後當に疾に滅すべし」(列二・九左)と云ふは僧團の富裕にして、これが爲めに却つて出世間的に隱遁したことを顯はすものであらう。大集經摩訶迦葉會(地五・三九)は峻烈の

筆致を以て、當來世五百歳の世に相似々像の沙門が、自活の爲めに袈裟を纏ひ、自活の爲めに佛像を造ることを云ひ、又經を讀誦すること少なく、唯舍利塔廟を供養するの業をのみなしてゐることを(地五・三五)云うてゐるが、言稍強過ぎるとは云ひ、又當時の塔廟崇拜を物語るものであつて、これと對照して小品般若の法舍利即ち經典崇拜の意味を見ることが出来るものである。實際に於て部派佛教は大迦葉の嚴肅な形式主義を繼承するが故に、律法的であり、律法的なるが故に世間と交渉乏しく、交渉する點は在家者の供養にあるが故に、塔廟佛像の供養に行くのみであり、この交渉の缺乏を出世間的として高踏し、部派相互の論議にその勢力を集注したものであつたのである。若し佛滅四五百年代の狀勢が略かくの如しとすれば、勿論部派佛教の長所及び特徴は、佛教史上無みすることは出来ないにしても、この實狀に嫌厭たらず、従つてその不滿の情から、正法止住五百年の教語を想記し、正法に對して像法(Dhamma hatiripaka)、正法隱れて像似の法の時代といふ感じが迫つて來たであらう。

このことに就いては、私は既に他の論文(現代佛教講座第四號)に於て少しく觸れたのであるが、茲ではそれが主問題であるから、猶再び述べて置きたいと思ふのである。上述の如く、佛滅四五百年年代は、第一に佛世を去ること遠く、釋尊の人格的感化が消失してゐる。第二に部派對立となつて、問題が宗我的になつてゐる。第三に宗我的教義の結果として、精緻ではあるが煩瑣極まりない

ものとなつた。第四に上に云ふが如く出世間的といふ好名目に隠れて僧苑に閉居し、社會に働きかけ實動する力を缺いて來た。この教狀を像法とか像似の法とか名けるのは、長い間の現狀不滿の悲觀と焦燥の氣持ちからであることは明かであると思ふ。大乘經典が殆んど總てこの五百年代を嘗り、沙門は悉く像似の沙門にして、その説く所はみな像似の教法であるといふは、この理由に依るものである。部派宗教の典籍には殆んどこの像法の文字がなく、像法の文字あるは餘程後出が纔入であることを思はせるのも(十誦律四九、張六・二四の如き)、後には自然にこの語が、一般佛教徒を支配する力を有するようになり、部派の人々にも無意識に用ひられるに至つたものであらう。

當來世後五百歲、有相似沙門衣服形顏似像沙門、戒不相似定不相似慧不相似。

摩訶迦葉會(地二・三九右)

五百歲正法滅時、當有比丘性懷貪著猛利貪欲映蔽其心樂離間語毒害於他、言詞麁獷躋躋住三法中、何等爲三所謂醫道貶易親近女人。

三律儀會(地一・七右)

この部派佛教の現狀に關する悲觀と焦燥は、遂に一種の革新運動となり、正法の復興を計ることとなつたのであるが、その人達の復興に關する確信が火の如く燃え上つてゐたことは、次の經句に依つて知ることが出来る。

當請如來護念斯經於後末世五百歲時令廣流布。

思益梵天所問經(字一・二一左)

惟願世尊護念是法於當來世後五百歲廣宣流布。

同經(字一・二二右)

於後末世五濁俗時建立流演。

持心梵天所問經(字一・四七右)

後五百歲其不受此經法將知是等爲魔所持墮佛法外。

大集經虛空藏菩薩品(玄一・一〇八)

教界の現状は悲觀的なりとは云へ、其の底に正法に對する確信があり、復興に關する火の如き熱があつたことが、佛教の運命的な五百年代の危機を脱して、佛教をして再び、以前に倍加するの力を顯し、洋の東西に亘る大宗教たらしめたのである。それは丁度奈良朝の佛教が爛熟して、全く教化力を消耗した時に、傳教、弘法の二大師等に依つて、全く新たな立場からして、再び佛教の勢力を盛り返したにも比すべきものであると思ふ。それであるからして、部派佛教といふものを中心にして考へれば、五百年代は正法時終つて、像法の時となつた。即ち部派佛教が正法に似たもの、ぬけの殻を擱んで教化力を消耗した時代と云へるが、大きな佛教史の主潮流から云へば、正法の偉大な復興期と呼ばねばならぬのである。龍樹はこの五百年後といふを、専ら部派佛教に結び付け、部派佛教の教法を像法と指してゐることは次の諸文に依つて知ることが出来る。

佛知五百歲後、學者分別諸法相各異、離色法說識、離識法說色、欲破是諸見令入畢竟空故、識中雖無五情而說識即是六情、云云。

智度論四四(往三・一七)

佛滅度五百年後、像法中衆生愛着佛法、墮着法中言、若諸法皆空如夢如幻何以故有善不善。

同論八八(往五・四五左)

佛去久遠經法流傳五百年後、多有別異部々不同或言五道或言六道。

同論三〇(往二・五二)

是狂人未來世在我法中出家、出家者五衆、受戒者有七衆是聲聞人、著聲聞法、佛法過五百歲後各々分別五(百)部、從是已來以諸法決定相故自執其法不知佛爲解脫故說法而堅著語言故聞般若諸法畢竟空如刀傷心皆言決定之法。

同論六三(往四・一四)

以上に見るが如く、龍樹は像法と云ふものを部派の教理に專一に結び付けてゐるのである。青目も亦その中論疏に、

佛滅度後五百歲、像法中人根將鈍深着諸法述十二因緣五陰十二入十八界等決定相不知佛意、但著文字聞大乘法中說畢竟空、不知何因緣故空卽生邪見、若都畢竟空云何分別罪報應等、如是則無世諦第一義諦、取是空相而貪著於畢竟空中生種々過、龍樹菩薩爲是等故造此中論。

と云ひ、有部系の著有者と大衆部系の著空者の法を像法と見るが如き意底を示してゐるのである。

五

正法像法の意味が上述の如く解すべきものとすれば、實は正法時像法時と云ふ風に、この正法像法を時代に當てはめることはおかしいのであるが、前にも云ふが如く、これは部派佛法を主題とし

て考へたもの故に、いつしか時代を正法時代、像法時代としたのである。さうして若しこれを時代に付するものとして、その時代の長さを問題として云へば、正法五百年と云ふは動かないのであるが、像法も先きに云ふが如く、法滅時を千年とすることが古傳に依つて正しいとすれば、五百歳とせねばならぬ譯である。然し法住千年説を取るものはみな像法と云ふことを曰はない（雜阿含阿、育王傳、婆娑論等皆さうで、殊に大阿彌陀經に像法の文字のないのは特に注意すべき點である）。法滅千五百年説を取るものが像法千年説を取つてゐるのである。大集經月藏分法滅品はそれで、摩訶摩耶經もその系統である。只、悲華經は正法千年、像法五百年説を立てゝゐるが（宙三・三七）、この經典のみ何故正法千年説を取るかその意味は明かでない。然し兎に角、像法の終りに至れば經法滅盡するのであつて、世間と佛教とは其處に交渉を絶つのであるから、教のみあつて行證の缺けてゐると曰はれる末法時といふことはあり得ないのである。それで普通に正像末の三時と云はれてゐるが、三時を並べ説いた經典は實は無いのである。觀佛三昧經九（黃五・三七）に、「爲生末法者觀請世尊說觀像想」とあるが、この末法は末世といふ意味で、正法像法に對する末法といふことではあり得ない。然し次第に佛世を遠ざかるに従ひ、法滅時に近づくに従ひ、この法滅の年時に關する考方が變つて來る譯であるから、後に末法時といふものを生じ來つたのである。

六

以上にて大體、正像末の三法時に關することを説き終つたから、次に五濁の語に付いて申し述べねばならぬ。

五濁といふは、小阿彌陀經に云ふ却濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁であるが、順序は經典必ずしも一致して居らない。然し時代が悪く人間が拙ないといふ意味であることに一致してゐることは申す迄もない。この五濁及び五濁の一々の名目については、雜阿含三十二卷の第二經(辰三・八三左)に、命濁、煩惱濁、衆生濁、見濁の四濁が出てゐるが、同本の巴利雜尼柯耶一六・一二には只、「衆生の衰へに於て」そのみあつて、五濁のいづれも出て居らないから、この名目は名部共通のものでなく、且つ初期の大乗經典、阿閼佛國經、大阿彌陀經に出て居らないから、後世有部の徒が採用して、その經典に挿入したものであらう。このことは、こゝにいふ名目、こゝ云ふ感情が釋尊にある筈がなく、時代に關する悲觀意識が生む所のものであるから、佛滅五百年後に生じたものに相違ない。大乘智印經(宙一・三三)、賢劫經(黃四・三六)、維摩經(黃七・一八)、寶幢分(地二・一〇)、大悲經(盈九・一〇二)、悲華經(宙三・三七)等に顯はれる五濁世界又は五滓世界はその悲觀意識の反映、又はその連續であらねばならぬ。それにもう一つこの世下り人拙なしの感情を起させた動機は、阿閼佛國經、大阿彌陀經に依つて作られた淨土對穢土の思想の發生である。この思想は原始佛教時代にはなかつたもので、人天界の區別はあつても、淨穢對立のものではなく、涅槃の生活に對して、一括し

て迷妄の世界とせられたのみであつたが、佛陀觀が發達して、諸佛を建立し、諸佛の出世の時代を畫くにつれて次第に淨土觀を形成し、彌勒の淨土が阿閼佛の淨土となり、次に阿彌陀佛の淨土となり、茲にその淨土に反映して、この世界の醜惡が悪くまれるに至り、佛滅五百年代の危機の感情と相からんで、世紀末の如き感じを起させたものに相違ない。維摩經はその淨穢二土對立の觀念を破つて、淨穢の相違は眼孔の相違であり、眼孔の相違は心の相違であることを物語り、悲華經は、土勝れたるが故に、佛勝れたりといふ思想を斥け、惡土に於て成佛するが故に釋迦牟尼佛は最も偉大なる佛陀に在ますことを高調して、釋尊のために萬丈の氣炎を上げてゐるのである。然しかうした批判も努力も一度生じた一般的感情を殺すことが出來ず、五濁思想は觀無量壽經系統のあの痛烈なる罪惡觀を生むに至つたのである。さうしてこの五濁といふことは實は佛世をも包んでゐるので、釋尊は特にその本願に依つてこの五濁雜亂の世に生れられたのであるが（小阿彌陀經、寶幢分、悲華經等この意味である）惡いものは惡いものと重ねるといふ心理から、於後末世五濁劫中（大乘智印經一・三三）と曰はれ、末法五濁と熟して、益々末世程惡いといふ感情を顯はすに至つたのである。

七

法滅の思想は直接、この末世五濁の考と結びついては居らない。それは前にも云ふように、尼僧

教團成立について訓誡的意味を主として曰はれた法住千年の語が、必然的に法滅千年を曰つてゐるから、そこから根を張つてゐることは明白である。然し、次第に時を経て佛世を遠かる一方その千年に近づくに従ひ、この法滅が問題となることも當然であるから、それに内外の事情が組み合せられて、法滅に關する具體的記事を見るに至つたものであらう。現在我々の藏中に有するこの法滅記事は、八種であり、その中法住記の一種は全く別のものであるけれども、他の七種は一系統の記事で、麁細を異にするのみである。それであるから法住記のものは別にして、七種のものゝ表を作つて見よう。

雜阿含		阿育王傳	
西方鉢羅婆		藏一〇・二四 婆婆論 收八・二九	
北方耶槃那		西方鉢牢	
東方兜沙羅		達累	
南方釋迦		北方闍無那	
拘睺彌摩因陀		筏戾車	
羅西那子難當		難可看視	
拘睺彌		憍餉彌	
迦旃延說法		迦丁比丘說	
撥羅在於後		大集經月藏分摩訶摩耶經	
耶槃那近在南方中國		南方邊夷國波羅帝	
北方晉土		西方邊夷國百祀	
大秦在於前		北方邊夷國善夷釋迦	
安息在於中央		捷秋	
大軍子難着		俱睺彌	

十二般遮于 瑟		十二般遮會		波梨國失師迦三藏比丘	
巴連弗阿耆達 多子弟子	須達那子須達 (善意)	室史迦(槃株)	尸師	戶依仇	十二年般遮會
商主須陀那子 修羅他	修羅陀	蘇刺多	須賴	須陀流(善)	沫羅多
安伽陀	噫伽度	阿斯	上頭	安伽多	羅漢
大提木叉	樂面				
佛滅千年	佛滅千年	佛滅千年		佛滅千五百年	佛滅千五百年

物語の筋は、佛滅千年(若しくは千五百年)に、人々法を守らず、非法を募り、爲に風雨時に違へ華果實らず、食物が無くなつてゐる時に、外寇があり、佛塔を破壊し僧尼を殺し、佛法に害をなしてゐたが、憍賞彌の王大軍の子難當、その外敵を放逐し、大に佛教を奨勵し、大法の爲に働き、その代に、失師迦といふ三藏を暗んじてゐる人と、須羅他といふ阿羅漢とあり、共に難當王の父王の死に會し、難當王に法話して、益々信を堅めしめたが、憍賞彌國中の比丘等會して、布薩をなした時失師迦上座となつたが戒律を暗んじて居らず、波羅提木叉を讀むことが出來ず、須羅陀羅漢自ら戒律を十分に受持してゐることを語り、失師迦の弟子安伽陀これを怒り、これは自分の師失師迦を

辱するものだとて、劔を抜いて切つた。時に夜又大提木又これを見て大に怒り安伽陀を殺し、又兩方の比丘互に相争うて殺し合ひ、王初め、一國の優婆塞は悲しみあきれ、この隙に乗じて、邪見の輩佛法を迫害し、遂に佛法の滅亡を來したといふのである。

この物語は第一に、西方の耶槃那 (Yavana、阿育王傳の閻無那、月藏分の百祀、迦丁比丘經の耶來那これに當り、迦旃延說法經の大秦もこの耶槃那を意味するものであらう)、北方の釋迦 (Saka、阿育王傳の釋拘、月藏分の善意釋迦、迦旃比丘說法の安息、迦丁比丘經の捷秋に當る)、の侵入と、南方の鉢羅婆 (Palhava、阿育王傳の鉢牢、月藏分の波羅帝、迦旃比丘經の撥羅に當る) の勃興侵略を示し、これらの侵入侵略をふせぎ、且つ征服して印度統一をなしたる佛教王の事蹟を物語つてゐるのである。印度の歴史の上でこれを見ると、Nasik の第三洞の刻文に依つて、サータヴァーハナ王朝の Gotamiputra Śrī Śatkarṇi が、恐らく紀元百年迄のうちに、Saka, Yavana, Palhava 及び Kṣatrapa 種を亡ぼし、Asika, Asaka, Mūjaka, Suratha, Kukurā, Aparanta, Anupa, Vidarbha, Ākarāvanti を領したことを知るこゝが出来る (Epigraphika Indika, Vol. VIII, p. 610. Ancient History of Deccan, p. 23.)。恐らくこの事件を指すものであらう。婆娑論はこれらの諸族の名を出さず、只達絮 (Draṣṭa)、篋戾車 (Mleccha) とのみしてゐるが、達絮は Palhava 篋戾車は蠻族の意味であるから Saka 及び Yavana を含むものと見るこゝが出来ゐる。若しこの記事に關し、私の想像を當れりとすれば、

この法滅記事の最初のは、紀元二世紀に書かれたとせねばならぬ。

第二にこの物語の含む第二要素は、巴連弗市に生れた弟子（Śāṅgha, 婆娑論の室史迦、月藏分の失師迦、迦丁比丘經の尸依仇、迦旃延比丘經の刀利これに當り、阿育王傳は須達としてゐる）が三藏受持者であつて、學者を代表し、須羅他（Suratta、婆娑論の蘇羅多、月藏分の疎羅多、迦丁比丘經の須陀流、迦旃延比丘經の須棘これに當り、阿育王傳は須陀羅としてゐる）が、阿羅漢にして體驗者を代表して居り、この學者側と體驗者側との衝突に依つて救ふ可からざる混亂を生じ、遂に佛法の破滅を見るに至るといふことである。この教法破滅の必然的要素が果して紀元一二世紀に、その端を見せ出してゐたかどうかわからないが、その教法の破滅が、決して外的壓迫等の外因に依るものでなく、内に分裂し鬭爭し陥し入れ合ふ所の内因に依るものであることを示す意味に於て、この物語は興味あり且つ教ゆる處が多いと思ふ。

印度の佛教の滅びたに就いては、いろ／＼の原因があり、簡単に云ひ切ることが出来ないであらうけれども、これを概括的に云ふと、第一に蠻族の侵入（侵入後も佛教化せざる）、異教の王の迫害第二に印度教そのものの復活、第三に内部の生命喪失であらう。第一の迫害に就いては、印度に五回の迫害を數へることが出来るが、この内婆娑論一二五（收五・一〇七右）は、中印度に於ける紀元前二世紀の補沙友（Pūṣpamitra）の迫害と、迦濕密羅に於ける紀元前後の達羅陀（Daratha?）の迫害

を記してゐる、この法滅記事が書かれる時分には、この二つの迫害が知られて居た筈であるが、それには少しも言及して居らない。又印度教の復活は恐ろしい大原因であつたのであるが、これは法滅記事が書かれる時代には、未だ問題となるに至らなかつたので全く觸れる所がなかつたのであらう。

次にこの六種の同一系の法滅記事中、最初出のものは何れかと云ふに、私は婆婆論の記事が最も古く、それから阿育王傳の記事が生れ、ついで雜阿含に挿入せられ、一方迦旃延比丘經迦丁比丘經等を作ると共に、月藏分の記事を生んだものだと思ふものである。

最後に残した法住記の記事は全然その記事の立場を異にするものであるから、今の問題ではないが、正法は永く繼續して、人壽十歳刀兵劫に、佛法暫時滅没し、百歳に至つて、十六羅漢此の前に顯はれ、正法を説き、六萬歳に至つて正法流行し最も盛んになり、七萬歳に至つて、初めて正法永く滅没し、七萬俱胝の獨覺一時に出現し、八萬歳の時の彌勒出現を待つといふのである。千年又は千五百年の佛法が滅盡するといふ考が、諸部派間に行はれてゐた中に、その法滅思想を打破して、法の永遠なる隆盛を高潮した法住記の記者の心事は壯とせねばならぬ。